

平成28年度 学校評価 総括評価表

徳島県立みなと高等学園

重点課題	重点目標	自己評価			学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標と活動計画	評価	総合評価	学校関係者の意見	
人権教育の推進	<p>【学校目標】 生徒一人一人の人権を尊重した教育を徹底するとともに、自他を大切に育てる態度の育成及びいじめなどの人権侵害を許さない人権感覚を育む。</p> <p>① 生徒がお互いの人権や個性を認め合えるような環境を整えるとともに、いじめの早期発見・早期対応に努める。 〔生徒指導・人権課〕</p> <p>② 生徒人権委員会活動や「中高生による人権交流事業」への参加を通して、人権意識の高い生徒の育成に務める。 〔生徒指導・人権課〕</p> <p>③ 学校と家庭が一体となった人権教育を推進する。 〔生徒指導・人権課〕</p>	<p>評価指標</p> <p>① 教職員による「さん付け呼名」の共通理解といじめに関するアンケート調査の実施（各年間2回以上）</p> <p>② 南部ブロック生徒部会や「中・高生による人権交流事業」への参加人数（20人以上）</p> <p>③ 人権教育研修会と人権コンサートの実施（各1回以上）</p>	<p>評価指標の達成度</p> <p>① 「さん付け呼名」の共通理解を図る場を3回設けるとともに、各学期末にいじめに関するアンケート調査を実施した。</p> <p>② 南部ブロックや県全体の生徒部会に毎回参加し（10回）、12月の人権交流集会も合わせて延べ25人が参加した。</p> <p>③ 人権教育研修会を2回、人権コンサートを1回実施した。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） 個々の生徒の障がい特性を理解し支援することを通して、一人一人の人権を尊重した教育活動が実践できた。前期には、いじめの早期発見や防止を目標に研修・啓発を実施した。</p> <p>また、いじめのアンケート結果を教職員間で共有し、生徒の人間関係を把握することにより、いじめを生まない生徒指導を展開することができた。</p> <p>人権委員の「中・高生による人権交流事業」への参加によって、互いの個性を尊重し認め合い、いじめを許さない意識が高まり、生徒への啓発となった。</p>	<p>「さん付け呼名」は、学校創立当初からの取組と聞いているが、現在も続いているのは大変素晴らしい。ぜひ今後も継続して取り組んで欲しい。</p> <p>「中・高生による人権交流事業」の事務局を今年度担当して、南部ブロックで近隣の中学校や高等学校の生徒とワークショップ等と一緒にいたり、12月に教育会館で行った人権交流集会では、県内の中・高校生と班別に分かれて意見交換したりと、積極的に学校外での人権学習に取り組んでいる。今後さらに参加者を増やして交流を深めて欲しい。</p>	<p>○ 「さん付け呼名」のさらなる徹底を通して、互いを尊重し認め合う生徒の意識を高め、将来の社会的自立に結びつけていきたい。</p> <p>○ 校内では、PTA総会や人権コンサートでの啓発活動や、保護者や教職員対象の人権教育研修会での個人人権課題への研修の充実を図り、地域では、地元小松島市での人権推進活動への参加等を通して、家庭と学校が一体となった人権教育が推進できるように努める。</p>
		<p>活動計画</p> <p>① 教職員による「さん付け呼名」を研修や会議で周知徹底させて共通理解を図る。いじめに関するアンケート調査を実施し、いじめの早期発見と教職員への相談を促す。</p> <p>② 人権委員会活動の一環として南部ブロック生徒部会や「中・高生による人権交流事業」に参加し、他校生と交流を深めるとともに、交流活動の様子を文化祭の表現の部で発表する。</p> <p>③ 保護者・教職員を対象とした研修会や生徒・保護者・教職員を対象とした人権コンサートを実施する。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 新規赴任者への研修の中で、「さん付け呼名」の趣旨を説明するとともに、職員会議等で共通理解を図った。記名式のアンケートや担任による聞き取りにより、いじめの実態を把握し、早期に対応することができた。</p> <p>② 「中・高生による人権交流事業」に参加し、「いじめ」をテーマにした分科会で、他校生と意見交換することにより交流を深めた。また、文化祭で活動の様子をスライドを使って発表することにより全校生徒へ啓発することができた。</p> <p>③ 前期の研修テーマを「いじめ防止」と設定して、研修と人権コンサートを実施した。後期の研修テーマは、「発達障がいのある生徒への性教育」として講演会を実施した。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） ケース会議の調整等では、教務・研究の両課で連携を図りながら取り組むことができた。また、チェックリストを活用することでより具体的な目標設定が行え、就業体験等への指導に生かすことができた。</p> <p>全校で計画的に運用できるように、スケジュール提示や研修支援を行った。</p>	<p>「市町村で立てている支援計画」が中学校から引き継がれていると思うが、学校での活用方法を工夫するとともに、卒業後も支援を引き継いでいくためには、就業・生活支援センターや就労移行支援事業所のみならず、就労先にも理解啓発を促していくことが必要になってくると思われる。</p> <p>生徒と教員の間でチェックリストの結果に差がある場合には、そこを課題として本人にも説明する機会を設けて指導に生かして欲しい。</p>	<p>○ 各学部からあがった目標を達成できるように、時間割編制を工夫する。</p> <p>○ チェックリストの活用方法を工夫し、生徒が主体的に自分の課題を発見できる機会を設定したい。</p> <p>○ 新入生の引継ぎについては、今年度まで、4月に入って新担任が決定した後、中学校へ出向いていき、旧担任と引継ぎをしていただくため、次年度からは3月中に中学校の旧担任が本校に来て、引継ぎを行うことにした。</p>
個別の指導計画の効果的な活用	<p>【学校目標】 生徒及び保護者の教育的ニーズに応じた「個別の指導計画」を作成し実践することで、きめ細かい指導及び支援を組織的に推進する。</p> <p>① 「個別の指導計画」を作成し通知表と連動させる。 〔教務課〕</p> <p>② 「就労に関する自分発見チェックリスト」を全クラスで実施し、活用する。 〔研究課〕</p>	<p>評価指標</p> <p>① 担任や教科担任が中心となり、ケース会議等を開催し、指導目標及び支援の方策や評価等について教職員の共通理解を図る。（各学期ごと）</p> <p>② 商業・情報部はケース会議を1回以上開催して、部内で結果を情報共有する。生産・流通部は、各クラス毎に情報共有する。</p>	<p>評価指標の達成度</p> <p>① 目標設定と評価のためのケース会議を、前期と後期にそれぞれ2回開催し、教職員の共通理解を図ることができた。</p> <p>② 商業・情報部は2ケースについて、ケース会議を2回開催して、担任間や部内でチェックリストの結果をもとに、生徒の目標や指導方法等について話し合いを行った。生産・流通部は、各クラスの担任間でチェックリストの結果をもとに生徒の指導目標等について話し合いを行った。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） ケース会議の調整等では、教務・研究の両課で連携を図りながら取り組むことができた。また、チェックリストを活用することでより具体的な目標設定が行え、就業体験等への指導に生かすことができた。</p> <p>全校で計画的に運用できるように、スケジュール提示や研修支援を行った。</p>	<p>「市町村で立てている支援計画」が中学校から引き継がれていると思うが、学校での活用方法を工夫するとともに、卒業後も支援を引き継いでいくためには、就業・生活支援センターや就労移行支援事業所のみならず、就労先にも理解啓発を促していくことが必要になってくると思われる。</p> <p>生徒と教員の間でチェックリストの結果に差がある場合には、そこを課題として本人にも説明する機会を設けて指導に生かして欲しい。</p>	<p>○ 各学部からあがった目標を達成できるように、時間割編制を工夫する。</p> <p>○ チェックリストの活用方法を工夫し、生徒が主体的に自分の課題を発見できる機会を設定したい。</p> <p>○ 新入生の引継ぎについては、今年度まで、4月に入って新担任が決定した後、中学校へ出向いていき、旧担任と引継ぎをしていただくため、次年度からは3月中に中学校の旧担任が本校に来て、引継ぎを行うことにした。</p>
		<p>活動計画</p> <p>① 入学時に提出された「個別の教育支援計画」をもとに、一人一人の教育的ニーズを把握したうえで、「個別の指導計画」を作成し、通知表と連動させる。</p> <p>② チェックリストで課題となった項目を、「個別の指導計画」の優先目標として位置づけることにより、年間目標等に反映させる。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 「個別の教育支援計画」の教育的ニーズを、「個別の指導計画」の指導目標や支援の方策に反映するとともに、通知表として配付した。</p> <p>② 商業・情報部の2・3年生は、昨年度実施した結果を今年度の年間目標に反映させることができた。商業・情報部の1年生と生産・流通部の生徒は、今年度の前期にチェックリストを実施し後期の目標に反映させることができた。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） ケース会議の調整等では、教務・研究の両課で連携を図りながら取り組むことができた。また、チェックリストを活用することでより具体的な目標設定が行え、就業体験等への指導に生かすことができた。</p> <p>全校で計画的に運用できるように、スケジュール提示や研修支援を行った。</p>	<p>「市町村で立てている支援計画」が中学校から引き継がれていると思うが、学校での活用方法を工夫するとともに、卒業後も支援を引き継いでいくためには、就業・生活支援センターや就労移行支援事業所のみならず、就労先にも理解啓発を促していくことが必要になってくると思われる。</p> <p>生徒と教員の間でチェックリストの結果に差がある場合には、そこを課題として本人にも説明する機会を設けて指導に生かして欲しい。</p>	<p>○ 各学部からあがった目標を達成できるように、時間割編制を工夫する。</p> <p>○ チェックリストの活用方法を工夫し、生徒が主体的に自分の課題を発見できる機会を設定したい。</p> <p>○ 新入生の引継ぎについては、今年度まで、4月に入って新担任が決定した後、中学校へ出向いていき、旧担任と引継ぎをしていただくため、次年度からは3月中に中学校の旧担任が本校に来て、引継ぎを行うことにした。</p>

<p>キャリア教育の充実</p>	<p>【学校目標】 生徒個々の資質や適性に応じ、職業能力や意欲等を高める指導を系統的・組織的に実施し、社会的・職業的自立に結びつける指導を推進する。</p> <p>① 生徒一人一人の適性や能力に応じた就業体験を実施するとともに、生徒・保護者、関係機関等と共通理解を図り、最適な進路選択ができる。 〔進路指導課〕</p> <p>② 卒業生へのアフターケアを実施することにより、進路先での定着を図る。 〔進路指導課〕</p> <p>③ 各種検定において資格取得に向けた取組の充実を図る。 〔研究課〕</p>	<p>評価指標</p> <p>① 就業体験2回以上。進路説明会1回（1年生の保護者対象）。拡大進路相談（2年生の生徒と保護者対象）を個別に実施。</p> <p>② 全ての卒業生の進路先を訪問。 平成27年度卒業生の離職者数0人。</p> <p>③ とくしま特別支援学校技能検定において、上位級（3級）取得者80%以上。</p> <p>活動計画</p> <p>① 進路指導課が中心となって、HR担任や保護者、事業所等と綿密に連携して就業体験を計画・実施するとともに、生徒や保護者のニーズに応じた、進路に関する相談会を実施する。</p> <p>② 定期的に卒業生の進路先を訪問するとともに、必要に応じて関係機関を交えたケース会議を実施する。</p> <p>③ とくしま特別支援学校技能検定の4部門8種目に生産サービス科と流通システム科の生徒が参加して授業の成果を發揮する。</p>	<p>評価指標の達成度</p> <p>① 1年生は校内実習と現場実習の2回、2・3年生は個別に必要な応じた就業体験を実施した。進路説明会を12月に、2年生対象の個別の拡大進路相談を1月～2月にかけて実施した。</p> <p>② 卒業学年の進路担当者が中心となって、全ての卒業生の進路先を訪問するとともに、関係機関と連携協力して離職を未然に防いだ。</p> <p>③ とくしま特別支援学校技能検定において、93%の生徒が上位級（3級）を取得した。</p> <p>活動計画の実施状況</p> <p>① 生徒の適性や本人・保護者のニーズに合わせた就業体験を実施することができた。また、1年生は保護者対象の進路説明会、2年生は関係機関と連携して個別に拡大進路相談を実施した。</p> <p>② 関係機関と連携し、全ての卒業生の進路先を訪問するとともに、新たな課題が出てきた場合には、その都度ケース会議を開催し、離職を未然に防いだ。</p> <p>③ 生産サービス科・流通システム科の生徒を中心に、全ての種目に参加した。商業ビジネス科や情報デザイン科の生徒も、進路先の業種に合わせて希望者が検定に参加することができた。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） 今年度より、各学年に進路指導担当者を置いたことにより、各学年の実態（生徒・保護者・担任のニーズ）に応じた就業体験・進路学習・進路相談の計画と実施ができた。 卒業生のアフターケアについても、前年度卒業学年の課員が担当することで、よりきめ細かなフォローを行うことができた。 関係機関との連携については、在学中から卒業後への支援の移行について、役割分担を明確にすることができた。 生徒は上位級を取得するとともに、専門技能を身につけたことで、就労に対する意欲や自信も身につけることができた。</p>	<p>ひのみね総合療育センターで卒業生を2名受け入れているが、よく働いてくれている。</p> <p>拡大進路相談に保護者として参加してみて、就業・支援センター等から思っていた以上に手厚く支援が受けられるということが分かった。子ども自身も自分で考え、自分の言葉で進路について話すことができ、明確な方向性を得る良い機会となった。</p>	<p>○ 生徒の就労への意識を高めるために、卒業生を講師に招いて体験談を聞く機会等を計画的に実施したい。</p> <p>○ 個別の進路指導の方向性については、HR担任と各学年の担当者がより綿密に共通理解を図っていく。</p> <p>○ 今後も離職者をなくすためには、卒業後すぐの進路先（一般・福祉就労）について、本人や保護者の意見を尊重しつつ数年後の生活を想定したアドバイスを行うとともに、継続的なアフターケアを行っていく。</p> <p>○ 流通システム科の生徒の受検種目が多く、生徒の過重な負担にならないように調整していく。</p>
<p>センター的機能の充実</p>	<p>【学校目標】 専門性の向上に努め、高等学校及び幼稚園、小・中学校に在籍する発達障がい児に対し積極的な助言及び支援を推進するとともに、保護者・地域・関係機関と密接に連携し信頼される学校づくりに努める。</p> <p>① 県内の学校等に対して、障がいの理解や教育的支援に関する情報提供等を行い、センター的機能を果たす。 〔研究課・総合支援課〕</p> <p>② ハナミズキゾーン内の関係機関との連携を深め情報共有する。 〔管理職、特別活動〕</p> <p>③ 信頼される学校づくりのため、積極的な情報発信を推進する。 〔情報課〕</p> <p>④ 保護者との連携協力を推進する。 〔総務・環境課〕</p>	<p>評価指標</p> <p>① 外部依頼の教育相談件数50件、研修会等への支援回数10件以上。全国情緒障害教育研究協議会への参加者500人以上。</p> <p>② ゾーン関連の行事（乳児院祭りやひのみね祭等）への生徒と教職員の参加。</p> <p>③ 行事毎のホームページ更新数130回以上と学校案内パンフレットの作成。</p> <p>④ 事業所見学会への参加者20人以上、PTA通信の発行を年間3回以上、保護者と生徒と一緒に活動する会を年間3回以上実施。</p> <p>活動計画</p> <p>① 長期休業中に公開研修会を実施するとともに、学校等からの要請を受けて、教育相談や研修会等への支援を行う。本校が事務局となり、全国情緒障害教育研究協議会を8月に開催する。</p> <p>② ハナミズキゾーンの連携会議に教頭が毎月出席する。ゾーン関連の行事等へ教職員が生徒と一緒にボランティアとして参加する。</p>	<p>評価指標の達成度</p> <p>① 外部依頼の教育相談は43件で、研修会等への講師依頼が12件あった。本校が事務局で開催した全国情緒障害教育研究協議会へは、県内から581人、県外から105人の申込みがあった。</p> <p>② 乳児院祭りやひのみね祭に生徒や教職員がボランティアとして参加した。</p> <p>③ ホームページ更新数は1月31日現在で129回であった。また、学校案内パンフレットを6月末までに作成して、7月の受検生対象学校見学会で活用した。</p> <p>④ 事業所見学会（3カ所）へ30人が参加した。また、PTA通信を年間3回、保護者と生徒と一緒に活動する会を年間3回以上実施することができた。</p> <p>活動計画の実施状況</p> <p>① 冬季休業中に1講座の公開研修会を開催した。また、地域の学校からの要請を受け、巡回相談員が中心となり、年間を通して相談活動等を実施した。全国情緒障害教育研究協議会を8月25日・26日の2日間実施することができた。</p> <p>② ハナミズキゾーン連携会議に教頭2人が毎月出席して施設間で情報共有するとともに、各施設のお祭りに生徒と教職員がボランティアとして参加することにより、連携協力できた。</p>	<p>総合評価</p> <p>（評定）A （所見） 県内の学校に出向いて教育相談や研修を行ったり、公開研修会を実施したりすることでセンター的機能を果たすことができた。 毎年、年間2回開催している徳島県発達障がい教育研究会を全情報研大会と同時開催とすることで、県内外の多くの参加者に発達障がい者への理解や支援について、広く発信することができた。 乳児院まつりに9名ハロみね祭に12名の生徒がボランティアとして参加し、活動を通して地域の方とふれ合い、責任を持って取り組み、達成感や成就感を味わうことができた。</p>	<p>日頃より、学校の駐車場や研修室を活用させていただいたり、夏季休業中にハナミズキの就業支援事業に全面的に協力していただき感謝している。ただ、相談者が学校の駐車場を使用する場合、障がい特性からこだわりがあってすぐには変更ができない場合があるので了承して欲しい。</p> <p>乳児院祭りやひのみね祭では、毎年生徒や先生方にお手伝いしていただき助かっている。今後も継続してお願いしたい。</p>	<p>○ 引き続き中学校・高等学校に対する相談支援や研修支援を実施することにより、一般校に在籍する発達障がいのある生徒の理解や支援について啓発に努める。</p> <p>○ 年間2回開催している徳島県発達障がい教育研究会の内容を見直し、高等学校等での実践に繋がるように改善を図りたい。</p> <p>○ 卒業後の就労に向けて、保護者の理解と協力を得るために、来年度も事業所見学会を3回以上実施する。また、保護者間の連携を深めるため、月1回の茶話会を継続するとともに、卒業生の保護者にも講師として参加していただく。</p>

		<p>③ 各課や教科担任等が、積極的にホームページを通じて情報発信できるように、ICT機器を設定するとともに、各課が連携協力して学校案内パンフレットを作成し、学校見学や研修会で配付する。</p> <p>④ PTA活動の一環として、事業所見学会や茶話会の実施、PTA通信の発行、「親to子withみなと」を実施する。</p>	<p>③ 各課や教科担任等が、行事や授業の様子を時機を逃さず掲載することで、頻りに情報発信することができた。また、学校案内パンフレットを学校見学や研修会で活用することで、本校の教育活動について周知することができた。</p> <p>④ 年度当初の計画どおり、事業所見学会や茶話会を実施することにより、保護者の情報交換の場を設けたり、PTA通信の発行や「親to子withみなと」を連携協力して実施することができた。</p>	<p>ホームページや新しく作成した学校案内パンフレットを活用して本校の取組をより分かりやすく情報発信することができた。</p> <p>PTA活動では、各委員会が中心となって、保護者の希望する活動を計画・実行することができ、保護者間の情報共有や、親子で楽しめる機会を設けることができた。</p>	<p>みなと高等学園の教育は一步先を行っている。事業所等での実習も、担任の先生が必要に応じて付き添って手厚い指導をされており、子どもが自分のことを客観的に見られるようになってきた。</p> <p>その結果、子どもの反応がこれまでと違い、自分で考えて動くようになった。保護者としても大変勉強になる。</p>	<p>○ PTAの全国大会や中四国大会へ、県の代表校として複数名の役員が参加できるように組織の活性化を図る。</p> <p>○ ホームページの更新回数は、一昨年度が72回、昨年度が151回で今年度は155回(3月22日現在)であった。今後とも、個人情報の保護に十分留意しながら積極的な情報発信に努めたい。</p>
<p>特別活動の推進</p>	<p>【学校目標】 学校行事・生徒会活動・部活動など望ましい集団活動を通して、心豊かな人間の育成を図るとともに、交流活動を推進し地域や人と人とのつながりを大切にする態度を養う。</p> <p>① 部活動に参加することで、集団生活の決まりや礼儀を重んじ、仲間と協力する態度を養う。〔特別活動・保健課〕</p> <p>② 地域の施設を訪問し、作業や交流活動を通して奉仕の精神を養う。〔特別活動・保健課、教科担任〕</p> <p>③ 安全で安心できる学校づくりに務める。〔特別活動・保健課〕</p>	<p>評価指標</p> <p>① 部活動参加率70%以上。</p> <p>② 施設訪問・交流回数年間50回以上。</p> <p>③ 地震・津波、火災避難訓練回数年間6回以上。</p> <p>活動計画</p> <p>① 9種目の部活動に分かれて、毎週2日(火木)実施し、可能な限り県総体や高文祭に参加する。</p> <p>② 流通システム科の授業(環境園芸、ビルメンテナンス、福祉サービス)や部活動で、地域の施設を訪問して、奉仕活動を行ったり利用者と交流を図る。</p> <p>③ 毎回異なった想定地震・津波避難訓練や近隣施設(ハナミズキ・乳児院)との合同火災避難訓練を実施する。</p>	<p>評価指標の達成度</p> <p>① 78%の生徒が部活動へ登録して活動した。</p> <p>② 年間54回(園芸で24回、ビルメンテナンスで21回、福祉サービスで9回)実施した。</p> <p>③ 地震・津波想定避難訓練を4回、ゾーン合同火災避難訓練を2回、全国一斉緊急地震速報行動訓練を2回、計8回避難訓練を実施した。</p> <p>活動計画の実施状況</p> <p>① 毎週2日の部活動に加えて、早朝練習や長期休業中に積極的に取り組むことにより、県大会や全国大会にも参加・出品し、入賞することができた。</p> <p>② 地域の施設を訪問して奉仕活動を行ったり、学校に来ていただいて一緒に活動することにより、奉仕の心を養うとともに、社会性を高めることができた。</p> <p>③ 地震・津波避難訓練の内容を毎回変えて実施したが、生徒は落ち着いて参加することができた。また、近隣の保育園や地域住民との合同訓練や全国一斉緊急地震速報行動訓練にも参加した。</p>	<p>総合評価 (評定) A</p> <p>部活動における異年齢集団の活動や、地域との交流活動を通して、協調性や思いやりの精神を育むことができた。対人コミュニケーションスキルの獲得においては実践・経験値が多いほど向上するものと思われるため、さらに充実した活動を計画していきたい。</p> <p>異なる想定避難訓練を何度も実施することにより、落ち着いた避難行動がとれ、生徒・職員とも、防災に関する意識の向上や啓発ができた。</p>	<p>ゾーンとしての合同避難訓練や野菜の収穫等を通して乳児院の子どもやひのみね総合療育センター利用者との交流の機会をつくらせていただき、大変ありがたい。</p> <p>車いすの方でも野菜の収穫を体験することができるように、ひもを付けるなどの配慮をしていただき、参加者も大変喜んでおり、次回を心待ちにしているため、今後ともぜひ継続していただきたい。</p>	<p>○ 主体的で充実した特別活動を実施するためには、事前準備の時間を多くとることが大切であるが、現場実習を始め、様々な行事が設定されているため、活動の内容や時間の確保に工夫が必要である。</p> <p>○ 様々な特性や実態の生徒に対応できる活動の設定が求められるため、多くの教員の声を参考に計画を立てていきたい。</p>